

現代タイにおけるクラシックバレエ実践をめぐる諸相

出田恵史（麗澤大学）

## 1. はじめに

西洋の一民族舞踊であるクラシックバレエは今や世界中の至る所で実践されている舞踊である。発表者はこれまでほとんど注目されてこなかった東南アジアのタイにおけるクラシックバレエ実践について参与観察やダンサーやバレエ教師へのインタビューなどの調査を行ってきた。

本発表では、バンコクにある大学、バレエスタジオ、バレエ団に注目し、個別の事例の紹介を通じてその諸相を示すことを目的とする。

これまでの舞踊研究では、発表者の調査地であるタイにおけるヨーロッパ伝来のクラシックバレエの実践などは、タイ文化の諸相のひとつとは決して見なされてこなかった。これは、タイという国が近代国民国家として 20 世紀初めに成立して以降、恣意的に国民文化・国民アイデンティティの創出に力を入れてきたというタイのモダニティと重ね合わせる形で、専ら「伝統舞踊」「民族舞踊」「民俗舞踊」といったダンスがそのスタイルや歴史といった視点から研究対象とされてきたことが大きい。

このような先行研究の理解は、国民国家としてのタイのアイデンティティ形成という面において、いかに「タイ舞踊」が（再）創出され、利用されていったかを知る上で重要である。さらに、その過程で、「タイ舞踊」が学校教育システムにおいて「芸術の一形式」として位置づけられるようになったという点も重要である。

しかし、現代タイにおいては、実質的には 20 世紀中頃に伝播したクラシックバレエはこのような国民国家とアイデンティティといった上記の流れからは外れるものであり、これまでタイにおけるクラシックバレエは舞踊研究の研究対象として対象化されてきたとは言い難い状況である。

## 2. タイのバレエを巡る歴史的状況

これまで発表者が行った調査によれば、タイではバンコクにおいて 1954 年頃にはすでに、民間でバレエを教えるスタジオがフランス人女性ダンサーによって開かれていた。その後、彼女からバレエのトレーニングを受けた「第一世代」と呼ばれるタイ人ダンサー達が 1960 年代にイギリスへとバレエ留学を開始する。そして 1960 年代後半にかけて第一世代のダンサー達がタイに帰国するとバンコクやチェンマイといった都市で各自がバレエスクールを開き、それらがタイにおけるタイ人によるバレエ実践の拠

点となっていった。

その後、徐々にクラシックバレエ作品を上演するダンス集団や、バレエ団のようなものが存在するようになっていったものの、それらはある特定の作品のためだけに一時的なプロジェクトとして一定の公演期間限定で組織されたものに過ぎず、公演が終わると解散していた。それゆえ、それらのダンス集団やバレエ団はもはや存在していない。

そして、タイにおける常設のプロバレエ団の登場は 90 年代半ばまで待たなければならなかった。

## 3. バレエ実践

1917 年設立のタイ最古の大学であるチュロンコン大学の芸術学部の西洋舞踊専攻では、大学のカリキュラムの一環として、クラシックバレエの授業が開講されており、西洋舞踊専攻の学生が受講している。そこでは RAD のグレード試験に合格することが目標にされており、部分的にはワガノハメソッドによる指導もなされている。

バンコク市内にいくつかある第一世代の人々がイギリス留学から帰国した後に開いたバレエスタジオのひとつでは、アメリカのバレエ団でプリンシパルダンサーを務めたタイ人バレエダンサーを輩出しており、そこでは RAD に則った指導の下、グレード試験の合格や資格の取得が目標にされている。

その一方で、タイで唯一のプロバレエ団である Q バレエ団は、1996 年にある日本人女性によってバンコクに設立され、プロのダンサーとしてトレーニングする機会とクラシックバレエを習う機会を提供するとともに、バレエ団の公演を通じてダンサーを含む人々にプロのクラシックバレエ団のパフォーマンスを鑑賞する機会を提供している。

## 4. まとめ

大学やバレエスタジオでは、観客に見せるためにバレエ作品を踊るというバレエ本来のパフォーマンスの意味合いが薄れ、身体の技術的な側面がより重要視され、ワガノハメソッドや RAD といった特定のメソッドが導入されており、言わば「資格」取得のための教授や実践に重点が置かれている一方で、バレエ団では最終的な目標が公演を通じて観客にパフォーマンスとしてのバレエをみせることにあり、そのような資格やメソッドが重視されていないことが明らかとなった。